ある魔術師の伝説

猫舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある魔術師の伝説

【Ｎコード】
Ｎ２８９２Ｑ

【作者名】
猫舟

【あらすじ】
ちょっとしたミスで事故に巻き込まれ死んでしまったしまった水野拓斗。
神様の提案で異世界に転生することになった。神様から異世界最強の魔力を貰って・・・（注意：主人公チートの異世界ものです。苦手な方はお近くの『戻る』まで）

1話　序章（前書き）

生まれて初めて小説を書いてみました
色々変なところもあるかと思いますが。よろしくお願いします

1話　序章

「本当にすまんのぉ、こんなハズじゃなかったんじゃ」
知らないお爺さんが半泣きで俺に謝り倒してくる。
「あの～、状況が良く分からないんですけど・・・」
おじいさんは何か驚いた様子でこっちを見ると
「すまんのぉ、ちょっとした手違いでお主を殺してしまってのぉ・・・」

どうやら俺は死んだようだ
「いやいや　意味分かんないし、死んだって言うならお爺さんと喋ってる俺は何よ？」
「今のお主は肉体から離れた魂で、天国に向かってたのをワシが止めに来たんじゃよ。と言うかワシはお爺さんではなく、神様じゃ！」
訂正、お爺さんでは無く危ない人だったようだ
「信じておらぬな、周りをよく見ろ」
周り？　俺は言われたと通り見渡すと、近くのトラックの周りに人だかりが出来ていた

「お主あのトラックに轢かれたんじゃよ」
何言ってんだ、やっぱり危ない人だったよ――――
そのトラックのに血まみれの自分を発見した
「え！？　何？　俺が倒れてる・・・」
慌てて駆け寄ると、腹部から出てはいけない物が飛び出していたり
足があらぬ方向に曲がっていたりしていた

「ホントはトラックが電柱にぶつかるだけのハズだったんじゃよ・・・　まさかあんな何も無い場所でつまずくなんて思わんかったんじゃ・・・」
いつ間にか隣に立っていたお爺さんがそうつぶやいた

「マジで？」
「マジじゃ」
即答された

俺、水野拓斗は17年という短い生涯を終えた

ショックで頭を抱えていると
「事故とは言え、神であるワシが人間の人生を狂わしてしまった、本当に申し訳ない・・・しかし、この世界で生き返らせる事は出来ないんじゃが、この世界とは別の世界にワシが最高神として管理している世界があるんじゃ、その世界であればお主を生き返らせられるが。どうじゃろうか？」
無論――――
「お願いします」

「そうかそうか、いやよかったよかった、さて何か才能は付けるかの？」
「才能？」
どうやら生まれ変わる時に何か才能を付けてくれるらしい
「どんなのがいいかのぉ？　あの世界はこの世界とは違い魔法が存在するからのぉ、軽くあの世界で最大の魔力ってのでもいっとくか

の？なぁに心配せんでも、あの世界で生まれる人間を天才にするも無能にするもワシの気持ち一つでどうにでもなる、それにあの世界はある程度の力が無いと安心して生活できないからのぉ」
なにか色々問題発言があったような気もするが、いったんそれはおいて置いて
「魔法！？　魔法があるんですか？」
「そうじゃ、お主から見れば本の中の架空の物じゃろうが、あの世界では皆少なからず魔力を持っていて魔法が使えるんじゃ」
神様は嬉しそうに答える
「それじゃぁその最も多い魔力ってのとお願いします、あっ　あとその世界の言語の理解と読み書きが出来るようにってのも良いですか？」
「よいぞ、その程度ワシの気持ち一つで思うがままじゃ」
誇ったように胸を張る神様、やっぱり問題発言なきが・・・・
「それと護衛兼案内人として部下の妖精つけるから安心しておくれ、お主を送った後妖精も送っておくからの」
「分かりました、色々ありがとうございます」

「では行くぞ――――――――」

こうして俺は第二の人生をスタートさせた

2話　魔法

「行くってどうやって？　あ・・・」
一瞬世界が真っ暗になったと思ったら、次の瞬間俺は何処かの森の中に居た
「案外すぐなんだな・・・」
周りを見渡していると右側の地面が光った
「到着ぅ～！　おや？　あなたがミズノタクトさん？」
じっと見ていると、そこから背中に蝶の様な羽がある小人が出てきた
「そうです、あなたが護衛さんですね、これからよろしくお願いします。え～と」
「ああ私の名前はフェリよ、よろしく～」
「フェリさんですね、よろしくお願いします」
「ん～　もっとそんな硬くなくて良いよ、私のことはフェリって呼んでね」
初対面の相手に溜め口もどうかと思ったが本人が良いといっているので良いのだろう
「わかったよフェリ、じゃあ俺のことも拓斗って呼んでくれ」
タクトねオッケーなどと軽い返事が返ってきた

挨拶もそこそこにフェリが
「ところでこれからどうするの？」
「神様から何か言われてないの？」
「いや～　神様からは本人のやりたい様にさせてって言われてるから。私は案内と護衛をしろって言われてるけど、私天国出たの初めてだから案内はあまり約に立たないかもそのかわり護衛は一生懸命やるからね！」
「人選ミスじゃ・・・あ、いやなんでもないよ」
物凄く睨まれた。結局決めるのは自分で、フェリは俺について来る

だけなようだ
「とりあえずこの森を出ようか」
「さんせー」

運良く少し歩くと道を見つたのでそれにそって行くことにした
その間フェリがこの世界の事を色々説明してくれた
「この世界の情勢は、ノルド王国・ロドック連合国・ベルカ帝国の3つの国がこの世界の列強3国で他の国は列強国のどこかと同盟を結んで3つの勢力に分かれてるわ。3つの勢力の力はほぼ同じでここ十数年は大きな戦いは無くて小競り合いがあちこちで起きてるってとこね」
「へ～じゃあこの世界の町は全部その3つの勢力のどれかに属してるってこと？　小競り合いでも巻き込まれたら大変だ」
「いくつかの街が完全中立を宣言してるらしいわ、全国から商人が集まって来て一般に貿易都市と呼ばれてるわね、その貿易都市のどこかに行けば小競り合いに巻き込まれるって事は無いんじゃないかしら？」
「じゃあ当分の目的は貿易都市に行こうか、お金持ってないよね？　働く所あるかな～？」
「大丈夫よ、いざとなったら、金持の財布をちょっと拝借すればいいじゃない」
神様の部下が盗み宣言しちゃったよ・・・
「いやいや、そういう事しないために働くんだよ」
「当たり前じゃない、けどホントに困ったら仕方ないわよね？」
「まぁ背に腹は変えられないね」
そう言うとフェリは笑顔でウンウンと頷く

「ところで魔法ってどうやって使うんだ？」

「えっ？　神様から聞いてないの？」
「魔法があるってのは聞いたけど使い方は教えてくれなかった、やっぱり呪文とかがあるの？」
「呪文とかは無いわね、この世界で魔法って言うと、攻撃魔法と回復魔法があって、攻撃魔法は火・水・地・雷・風の５つの属性――――」
つまり５つ属性は人によって相性があり普通その相性がいい属性を使っているらしい。それと魔法には熟練度というものがあり相性のいい魔法を繰り返し使うことによって自然とあがるみたいだ
魔法の威力や使い勝手は、魔力と熟練度の高い低いによって決まるらしい。
「でね、どう使うかだけど、簡単よ？　体の中の魔力を使う分だけ集めて、同時進行で頭の中でその魔力が何属性でどうこうこうなって欲しいってのをイメージするだけでオッケーよ。魔力を集めるのに時間がかかるけどそれも魔力と熟練度によって短縮できるわ、天才と呼ばれてる人とかは集める時間が１０秒位で魔力を集めてるわね、ちなみに私は火属性で１７秒位で発動できるわ」
どうだ凄いだろと言わんばかりの顔でこちらを見てくる。
俺は熟練度は無いけど魔力は神様が魔力だけは大量にくれたけど、その場合はどうなるのかな？

などと思いながら歩いていると、先の方から激しい声が聞こえてきた
「くそっ！　もう少しで街に着くってのについてねぇな、サクヤ下がってなさい」
「ハッ！　おっさん一人で何が出来るってんだ、野郎ども一気に畳み掛けるぞ！！」
なにやらただ事ではないな
「なんだか私の出番のようね！」

と言って声のした方へものすごい速さで飛んでいってしまった

そこでは質素な馬車と体格の良いおじさんと俺と同い年位の少女を、いかにも盗賊ですって人相の人たち7人が取り囲んでいた

「うわなんだこのちっこいの！？」

「妖精っすよアニキ、知らないんすか？　魔法を使う魔物ですよ」

「うるせー！　妖精だろうが魔物だろうが関係無ぇ殺っちまえ！」

「ちょっと！　魔物なんかと一緒にしないでよね・・・・・・よし、いっけええええ！！」

やっと見えたと思ったらフェリの小さな体と同じくらいの大きさの火の玉が出現し、フェリの近くに居た盗賊3人を吹き飛ばした

「ふふ～ん♪　普通の妖精と違ってこっちは何年も天国で修行してんのよ！」

驚いて目が点状態になっている盗賊を尻目にそんなことを言っている

「おいおいマジかよ、列強国の隊長クラスの速さじゃねぇか・・・」

他の魔法は見たこと無いけど、さっき言ってた通りこの世界でもトップクラスの実力があるのだろう

「きゃぁ！」

「騒ぐんじゃねぇ！！　こいつがどうなっても知らねぇぞ！　そっちの魔物も魔法使うんじゃねぇぞ！」

山賊のリーダー格が少女を捕まえてナイフを向けている

「サクヤ！　クソッ、物が欲しいだけだろ娘を離せ！」

このおじさんはおそらくあの子の父親なのだろう、しかしまずい事になった。普通に戦えばフェリの魔法でこんな奴ら簡単に倒せるだろうが人質を取られては動けない・・・いやこう言う時の護衛だよと思いフェリを見ると

「むぐう・・・油断したわ・・・」

ダメそうだ

さてそんな様子を遅れてきたため盗賊に見つからず物陰から確認していた俺は
「俺が魔法使うしかないか・・・・な？・・・・」
正直自信ないです
「アニキ馬車の中は家財道具ばっかりですぜ」
「なにっ　う・・商人じゃなくてただの引越し途中の親子かよ・・・・
おい、ずらかるぞ馬車に乗り込め」
「女はどうするんで？」
「逃げ切れるまで連れて行くぞ、良いからさっさと行くぞ」
「あっそうか、金目の物がないから女を奴隷商に売っぱらうんですね」
おいおいマジかよ・・・・
「な、なんだと！　貴様ら娘を返せ！！」
「はいはいおっさん、動くと娘さん殺しちゃうぜ？」
「ぐ、クソどもめ！！」

自信ないとか言ってる場合じゃないな、えっとたしか魔力を溜めて・・・すると体が急に熱を帯びてその熱が右手に集中していった、これが魔力かな？
んで頭でイメージ・・・・属性は、雷が一番早いかな？　雷があのリーダー格が魔法に反応するより早く攻撃、殺すのは・・・・気絶させる位で、少女は絶対傷つけない・・・・

そうイメージした瞬間右手から巨大な電撃が飛び出し狙い通りリーダー格の男に直撃、男は声にならない声をだして倒れた。が電撃はそれだけでは収まらず馬車にの近くでリーダを待っていた他の盗賊に襲い掛かり、その盗賊たちも倒れた

世界最大の魔力ってのも伊達ではないみたいだ、イメージより威力が数倍凄かったが死んだ？　いやそうだとしても悔いる必要はないな、などと思いながら物影から出る。
「大丈夫でしたか？「ちょっとタクト！！　あなた凄いじゃない！！」グハッ！」
フェリが叫びながら突っ込んできた、鳩尾にクリティカルヒット・・・

「あはは、ゴメンゴメン大丈夫？　それにしても魔力集めだしてから発動まで1秒もたってないじゃない、天才通り越して化け物ね」
心配されて褒められて貶なれた、いや一応あれも褒め言葉か？

などと思っている間に親子の感動の再会（？）を終えたおじさんと少女が話しかけてきた
「少年、さっきの電撃は少年の魔法か？」
「はい・・そうです」
「おお！そうかいや～助かったよ」
「あの、本当にありがとうございました、私ホントに怖くて怖くて」ん？　この子近くで見るとめちゃくちゃ可愛いじゃんか・・・ここは紳士的に
「いえあなたが無事で何よりです」決まった・・・
「バカみたい」
フェリがとつぶやいて冷たい目で見て来る
すみません背伸びしましたもうしません

「しかし、こんな所にまで盗賊が出るなんてな、危ない世の中だ。
ところで少年見たところ変わった服を着てるが何処から来たんだ？」
「えーと・・」

「山の向こうの村から来たのよ」
とっさに答えられず口ごもっているとフェリが変わりに答えてくれた
「へ～そうかい、民族衣装ってもんか？　まぁいい、でその山の向こうからこんなとこまで何しに来たんだ？」
「村を出て旅に出て一人で生活しようと思いまして、あの、この近くに街ってありますか？」
「街？　ああこの道をあと1日位行くと貿易都市シルディアにでるぞ。俺たちもそこに向かってる途中だが少年達も一緒に行くか？」
「ホントですか！？　　いやー助かります」
「よし決まった、俺はガイウスってんだ、こっちは娘のサクヤだ」
「サ、サクヤですよろしくお願いします！」
ガイウスさんの隣で下を向いていたサクヤが早口で自己紹介をする。なんか脅えられてる？
「よ、よろしく、自分は拓斗って言います。こっちは、え～」
「護衛のフェリで～す、フェリって呼んでね♪」
「おう！　よろしくな、さて早速だが行くとするか」

挨拶も終わり4人は馬車に乗り込む
「すまねぇな、引越しの途中で荷物が多いがまぁ適当に座ってくれ」
その言葉通り中は家財道具だらけで座るのがやっとだった、場所が無いのかフェリが俺の頭の上に陣取ってる。正直重い
「今重いって思ったでしょ！」
「そ、そんなことはないよ」
「ウソだね、絶対思ったでしょ。まぁそれでもどく気は無いけど」
「無いんかい・・・」

馬車に揺られシルディアが見えるまで4人で色々話をした。そうやらガイウスさんは腕利の鍛冶屋で故郷の村で働くより大きな街で働いた方が働き甲斐があると思い、一番近くにあった貿易都市のシル

ディアに引っ越すところのらしい。
こちらの身の上も聞かれたが、まさか「異世界から転生してきました～」なんて言えるはずも無く、フェリの言っていた通り山の向こうの村から旅に出たと言う方向でボロが出ない程度に話した。
「タクトはシルディアに行って何をするんだ？」
「何をするかは決めてませんけど、どこかで働きたいと思ってます」
「へ～そうかい、だったらギルドに行って傭兵になったらどうだ？」
「ギルド？傭兵？　それってどんな事するんですか？」
「知らないのか？　えっとだな、一般人が手に負えない事をギルドに依頼して、傭兵がその依頼を受けるって感じだな。依頼は魔物や盗賊なんかを退治するって言った討伐形の依頼や、魔物が多く住む場所でなになにを採って来いと言った採取形の依頼が主で。街の代表とかから街の防衛や街の兵と協力して盗賊のアジトを壊滅させたりってのがあるな」
「そんな仕事できるかな～？」
「タクトさんなら出来ますよ！　魔力だって昔見た兵士の方達より明らかに強いですから」
「それならやってみようかな？　一人じゃ不安だけどフェリも居るしね、けどサクヤ敬語なんか使わずタメ口で良いって言ったじゃないか」
ここに来るまでに何度かそう言ったが一向に直らない、どうやら・・・
「命の恩人さんにタメ口なんて出来ません！　それに私もともとこういう口調なので気にしないでください」
だそうだ。サクヤ美人だしもっと親しい感じでお喋りたいな～とか思っているが、本人がこう言うので諦めよう
「じ～・・・・」
なぜかフェリが睨んで来る、何でかは分からないが正直怖い

「おっ　３人とも見えたぞ、あれがシルディアだ」
馬車を操作していたガイウスさんが前方を指差す
「あれがシルディアか・・・」

異世界に来て二日目早くも目的地の貿易都市に来ることが出来た、
これから傭兵になる為にギルドに行って、住むとこはどうしよう？
お金ないから宿には行けないな～・・・まぁ行けば何とかなるかな
「本当のスタートはあの街からだもんな」

2話　魔法（後書き）

作者は名前を考えるのが激しく苦手なので、出てくる地名・人名はほとんど漫画やゲームから勝手に使わせてもらってます。
「この名前パクリじゃねぇか！！」とか思っても、その大きな心でスルーして下されば嬉しいです。

3話　傭兵

「い、以外に遠かったな・・・」
「そうですね・・・」
最初に街を見たのは今日のお昼前、しかしその場所からだいぶ時間がかかり、街の門に到着したのは日没寸前だった

「おいフェリ着いたぞ、おきろって」
「ん・・・あと5分・・・・と1時間」
「一生寝てろ」
「それは流石に無理」
やっとおきた

まずは泊まる所の確保かな・・・そういや金持って無いじゃん、どうにかしないと今日も野宿だよ、ガイウスさんたちにこれ以上お世話になるのは申し訳ないしな、などと考えていると
「あ～、そこの馬車止まれ止まれー」
街に入る手前で門番に止められてた

「どうかしましたか？」
「ああちょっとな、最近帝国の間者が出入りしているとの噂があって街の警備を強化しているんだが。まぁその一環で街に出入りする者を調べろって命令なんでちょと協力してもらうよ」
「そうですか、私どもはネールの村から街で鍛冶屋を始めるため引っ越してきた者でガイウスと言います、こっちは娘のサクヤで、あっちの2人は途中で盗賊に襲われたのを助けてもらった恩人です」
「そうか鍛冶屋か！　いや～最近街で唯一の鍛冶屋が引っ越しちまって困ってたんだ、助かるな～。そっちの2人もいいぞ、盗賊退治するような奴が間者なわけが無いからな」

「ほう鍛冶屋は家だけですか、それはいい事を聞いた。初めの方は仕事が少ないんじゃ無いかって心配してましたが、大丈夫そうですね」
「ああ、多分街の衛兵の武器など注文するだろうから、しっかり働けよ」
「はい、ありがとうございます・・・・・・・・・はぁー、敬語疲れる」
「忙しくなりそうねお父さん、家に着いたら急いで荷物の整理しなくちゃ」
ガイウスと門番の話を馬車の中で聞いていたサクヤが嬉しそうに言う
それにしても中立の都市にも間者とか来るんだな、思ってたより安全じゃないのかもな・・・いやそれよりまずは宿だ
俺は頭の上にしか聞こえない声で
「フェリ、フェリ」
「ん？　どうしたの？」
「フェリお金持ってる？」
「持ってないわよ？　それがどうかしたの？」
「そうか～、いや今日の宿どうしようかな～って、今からギルドに行っても、依頼達成するには遅すぎると思うんだ」
「そうね～・・・そうだ！」
そういって後ろにつんである箱のとこに飛んでいった

「どうしたの？」
「ん～とぉ・・・　あっ、あったあった。こんな事もあろうかとこの間の盗賊が落っことしてった剣を2本持って来たんだよね～♪どこかで売れ21日分の宿代にはなるでしょ？」
「おっマジか、フェリナイスだ！」
「どうしましたか？」
「そうだサクヤ、おっちゃん、あなたたちこの剣買い取らない？」

「え？　ええ、鍛冶屋と一緒に武器屋もはじめる事にしたから、買い取ります。けど剣なんか持ってたんですか？」
「この前拾った」
「この前って・・・あーなるほど、見せてください」
剣の単価なんか知らないけど宿代になります様にと心の中で祈っておく

「ん～、この剣だったら1本10エルで2本で20エルね」
「20か・・・いやまぁ盗賊がそんな高価なもん持ってるはず無いか」
ぶつぶつ言いながらお金を受け取るフェリ

「着いたぞ！　新しい我が家だ！！」
ガイウスさんが興奮気味に言う
「なかなか立派な家だねおとうさん」
「おう、俺はこれから手続きに行って来るから3人は中で待っといてくれ」
「そうんじゃあおっちゃんの言うことに甘えさせてもらって・・・」
「ああ、ガイウスさんちょっと待ってください、フェリもこっち来て」
フェリの目が『え～もうちょっと居ようよ～』と訴えてくるがそうも行かない、すでにあたりは暗くなって来たが、これからギルドに行って宿を探してと結構忙しい

「自分達はこれからギルドに行こうと思います、ガイウスさん、サクヤ、短い間だったけどありがと」
「え！？　もう行っちゃうんですか？　もう少しゆっくりして行っても良いんじゃないですか？」
「大丈夫だよどうせ当分はこの街に居るんだから、暇が出来たらまた来るよ」

「そうかい、改めて助けてくれたことを感謝する。また何時でも来いよ！」
「はい！」「おっちゃん、サクヤまたね～♪」
こうして俺たちは2人と別れた

あ・・・ギルドの場所聞くの忘れてた・・・・・今更聞きに戻れねぇよ

運良くあまり時間はとらずギルドにたどり着けた
ギルドがある建物は1階に酒場とギルド、2階には宿屋があり宿屋を探す手間が省けた
「ん？　いらっしゃ～い。初めて見る顔ね何か御用かな～？」
中に入ってすぐに受付嬢に話しかけられた

「どうも、え～と傭兵になりたいんですが」
「分かりました～、この書類に名前を書いて下さい」
「はい・・・・・・書きました」
あ・・つい漢字で書いちゃった、まぁ良いかな？

「ん～、見たこと無い字ですねなんて読むんのかな？」
「水野拓斗です、水野が苗字で、拓斗が名前です」
「ミズノ＝タクトさんですね分かりました～。あとこの水晶に触ってもらえばＯＫです～」
漢字の上にこの世界の字でミズノ＝タクトと書き足している、まぁ間違いじゃないからいいや。けど水晶をさわるってなに調べられるの？指紋とか？・・・いや魔力か
すると初め透明だった水晶が、一気に真っ赤になった
「おぉ～・・・これは凄い魔力ですね～このタイプの魔力測定器で

計測不能なんて、傭兵なんかしなくてもその辺の国が雇ってくれるんじゃないかな？」
「自由気ままに生活したいんですよ」
「そうですか自由ですか～。大切ですよね～♪　魔力測定不能っと。ところでそっちの妖精さんはお連れさんかな？」
「そうよ、私も傭兵になりたいんだけど「むりですね～」・・なんでよ！！」
フェリが受付嬢に食って掛かる

「妖精は知性・理性も人間並みですが、妖精は魔物でギルドは人間の組織ですから」
まぁ当然といえば当然なのかな？俺この世界の常識とか知らないからわかんないや。
フェリは「そんなの納得できない」と騒いでいる

「あ～待って下さい、ストップストップ～」
「ハァハァ、何！！？」
こわっ
「傭兵は無理ですが、傭兵の使い魔ならなれますよ？　まぁその分報酬が増えたりとかはしませんが」
「・・・・しかたないわね、んじゃあそれで」
受付嬢は「分かりました～」と言って同じように名前と魔力の測定をさせた

「おめでとうございます今この時をもって、タクトさんにフェリさんは傭兵とその使い魔になりました～。私はシルディアのギルドの受付嬢のジルです～、これから傭兵についての説明をしますね～。傭兵の仕事は簡単に説明すると～・・・
ギルで依頼を受ける→依頼達成に向けて頑張る→途中で魔物を倒してギルドが買い取ってくれる素材を集める→依頼達成したらギルド

に戻る→お金を受け取り次の依頼へ・・・・
ってのを繰り返すだけです～。そうして依頼で稼いだお金がそのまま
ギルドポイントになって、そのポイントが一定以上になるとギル
ドランクが上がります、そうしたらよりもらえるお金が多い難しい
依頼が受けられるようになります～」
「分かったよジル、ところで今受けられる依頼って何かある？」
「ありますよ～？　三つ目狼の討伐ですね。けどまだ2人のライセ
ンス出来てないから～、明日の朝また来てね？」
「分かったよ、宿使いたいんだけど一泊いくら？」
「1泊5エルですよ～」
「ん、じゃあこれで」
「お部屋は2階の係りの者に聞いてください、ではごゆっくり～」

「ふ～、やっと屋内で寝られる」
部屋に入ってすぐにベットに飛び込む、この世界に来てまだ2日目
だが内容は元の世界の数週間分の濃さがあった
「私お腹すいたから下でご飯食べようよ～」
「もうちょっとこのまま居させて・・・」
「私先に食べてるから早く来てよね」
「ん～・・・・・ｚｚｚ」
そのまま俺は眠りについた・・・

「おきてよーもう朝よ」
「・・・・・・」
がぶっ　首に激痛が走る、全速力で
「イタっ！　イタイイタイごめんなさいおきますおきます！！」
「分かればいいのよ♪　ほらほらご飯食べて依頼受けに行くわよ」

3話　傭兵（後書き）

ほかの方の小説のようにひとつのセリフに何行も説明なんて出来ないですｏｒｚ
しょうがないので言葉数で勝負することにしました

※ご指摘ありがとうございます、変更いたしました

4話　夢の中

朝食を取り一階に行くとジルが手招きしてきた
「ライセンスできてるよ～、はいどーぞ」
ライセンスを受け取る、大きさは免許証位の大きさのカードで。名前とランクが書いてある、ちなみに現在Eランク
隣でフェリが自分のライセンスを受け取ってるけど顔が怖い
どうやら項目にミズノ＝タクトの使い魔と書かれているのが不満らしい

「このライセンスが無いと依頼が受けれないので無くさないで下さいね～？　あと身分証明書にもなるんで大体の関所は通れますよ～」
「分かったよありがと。じゃあ依頼を受けたいんだけど昨日のから変わった？」
「いいえ～、Eランクだと【ギグスの森の三つ目狼の討伐】と【シェード川沿いの盗賊団の討伐】の2つですね～。けど盗賊団の方は10人以上のパーティーを組む者ってのが条件ですので、受けられるのは三つ目狼だけですねどうかな？」
「じゃあそれでお願いします」
「はいは～い、じゃあ2人ともライセンス貸してね～」
「ん？　なんでよ？」
「ライセンスの裏にこの人は今までこんな依頼をやって来ましたよ～ていう情報を入れるんですよ？　・・・はいOKですのでお返しします～」
へ～そんな事までやるのか、けど何のためだろ？　聞いてみようとジルを見たら
「裏に一目で分かるように依頼不達成になった回数を設置して、意地でも成功させよう。と思わせるためですよ？」
まだ何も言って無いんですが・・・・てか理由ヒドッ

「あとこれも差し上げます、シルディア周辺の地図と魔物の図鑑です、ギルドが買い取る素材も載っているので参考にしてください。街を出る時門番にライセンスを見せて馬を借りる事が出来ますのでご利用ください」
「タクトほら早く行くわよ！」

街を出てギグスの森に向かうこと約2時間、目的のギグスの森に到着した
馬に乗れるのかって？・・・しってた？妖精って動物と話が出来るんだよ？便利だね

「いかにも魔物が居ますよって森だな・・・」
「まぁそうね。さて何々、『三つ目狼は普通の狼を従え行動します、森の中の動物を襲ったり近隣の村の家畜を襲ったりして生活をし、まれにゴブリンを襲うという報告もあります。巣は森の外側の開けた場所にあることがほとんどで、森の中で急に狼と遭遇する回数が増えたら近くに三つ目狼が居るとおもって警戒してください』ってかいてあるわ」
「ん～じゃあ森の中で開けた場所を探せばいいのかな？」
「多分そうね」
「ＯＫじゃあ出発ー！」
気合を入れて薄暗い森の中に入っていった

俺たちは森に入ってすぐに狼に襲われだした、どうやら運良く近くに三つ目狼が居るみたいだ
「正直万が一にも負ける気はしないけど・・・」

「数は結構多いから疲れるわね・・・」
と言いながら俺は約３０対目の狼に電撃を放つ
そると森の奥のほうからひときわ大きな狼が現れた、額に真っ赤な目があるのでどうやらあれが三つ目狼みたいだな、すると三つ目狼がフェリに向かって走り出した
「フェリ三つ目が行ったぞ」
「ふぅ、やっと出たわね！　・・・・・・・・いっけぇー！」
三つ目狼がフェリに噛み付こうと飛んだ瞬間、火の玉が現れ爆発した近くにいた普通の狼もろとも三つ目狼は吹き飛ばした。追撃しようと俺は三つ目狼に風の魔法を使ったカマイタチ放つ。
すでに爆風で虫だった三つ目狼はカマイタチに切り刻まれ絶命した
俊殺である。まぁ仮にも世界トップクラスの実力を持つ魔術師と、世界最強の魔力を持っている魔術師が2人だから仕方ないかな？
「楽勝ね～♪まぁ私たち強すぎるから仕方ないわよね♪」
フェリが三つ目狼の素材である赤い目と牙を取りながら嬉しそうに言う

「さて、依頼では1頭でいいはずだからこれで終わりね。これからどうするの？街に戻るの？」
「ん～せっかくだから森を散策してから戻ろうか」
「さんせーい」
その後3時間ほど森を散策した。途中三つ目狼やらゴブリンのやらと遭遇したけど脅威にはなりえなかった

「ゴブリンの角なかなか抜けないわね・・・んっしょ！」
「もうそろそろ街に戻ろうか、これ以上は馬1頭じゃあ運べないし」
「それもそうね、これ全部でいくらになるかしら？　楽しみね♪」
後ろで馬がおいおいその量運べとかマジ勘弁と言いたそうな顔をした気がするが気にしない。まぁさらに乗るなんて事は流石にせず歩

いて帰ることになった、風の魔法のおかげで馬の早足位のスピードが出たので４時間ほどで街に到着した

ギルドに戻りジルに素材の買取をお願いした
量が多かったので時間が掛かると言っていたので夕食を食べながら待っていたら、ジルが奥からやってきた
「素材の方を見させてもらいまして、買取の金額を決定しました～。」
「ホント？　ねぇいくらになったの？」
「まず依頼達成の報酬で２０エルです、そして素材の方ですが全部で１８０エルになります～」
「２００か結構儲かったわね」
「儲かったなんてもんじゃないですよ～、初依頼であなた方何Ｃランク波に稼いでるんですか・・・数える方のみになってくださいよ～」
「む～・・ゴメンネ♪」
「まぁいいですけど、あといきなりですが今回のポイントでギルドランクがあがってＤランクになります」
「あれ、そうなの？　やけにあっさりあがったね」
「確かにＥからＤへの必要なポイントは少ないですが、それでも普通は一ヶ月位かかりますよ。あなた方が規格外なだけです」
規格外って・・・「こらそこ自慢げに胸張らない」

まぁとにかく、後々世界中から最強のタッグと呼ばれることになる２人の初依頼は終了した

夕食を食べ終え自分の部屋に戻った俺は森での戦闘を思い出していた
「・・・・・さすがに冷静に見たらグロいな」
結構な威力の魔法だったので、それを受けた方はバラバラやらグチャグチャなど・・・・何であの時は平気だったんだ？
「うっ・・・思い出したら・・・気持ち悪くなってきた・・・・」
トイレトイレっと

部屋に戻るとフェリはまだ戻っていないようだ、『夜の街を探検してくる』とか言ってたが・・・あの体のどこにそんなに元気があるんだ
「やることもないし寝るか・・・ｚｚｚ」
ベットにもぐりこみ眠りについた・・・・・・・・

はずだった

周りは白一色の世界、目の前には老人が一人
「やっと繋がったか・・・」
「何か御用ですか神様・・・」
神様が居た

「ふむ・・結論から言おう・・・・ばれちゃった」
うん意味わからん
「これ睨むでない・・・お主を転生させたのがほかの世界の神にばれてしまっての」
「はぁ・・」
「もちろん今更死ねとは言わん、ただ連中を納得させるために神の使いとして働いて貰えんかの？」

「拒否権は？」
「あると思うか？」
「・・・・やらせて下さい」
面倒承知で生きるか、死ぬかの簡単な二択です

「そう言ってもらえると助かるの～」
「ところで具体的に何すればいいんだ？」
「うむ、お主には乱世を終わらせてもらう」
「・・・・・もう少し楽そうなのって無いですかね？」
「無い、ワシ全知全能な神じゃから。唯一人間の争いには介入できん、だからお主に争いを終わらせてもらいたい」
「どこかの国に属するんですか？」
「そうじゃな、今世界中の人間の夢に『この世に乱世を終わらせるための英雄を落とした。探せ』という言葉を流しておるから。どこかの勢力が接触してくるんじゃないかの？」

俺の平和になりそうだった生活が遠のく・・・

「まぁそんなにすぐには来ぬじゃろうから安心せい」
「・・・・わかりました、じゃあ起きますね？」
「ああ、がんばって来いよ～」
いつか殴る

目をあけると白の世界・・ではなく宿屋の天井だった
「まったく面倒なことを・・・ん？」
ベッドの横に何かを見つけた
「何だこれ？・・・・ローブ？」

真っ黒なローブを手に取ると紙が出てきた
『面倒ごとを引き受けてくれた礼に、神様パワーをつけたローブをプレゼントする。ｂｙ神様』
裏には神様パワーの内容が書かれていた
『対魔法・対物理攻撃・疲労軽減・自然治癒力の向上・身体能力の向上・毒無効・水野拓斗以外の者が装着するとローブの効果を打ち消し重さ８０ｋｇに変化する』

まさにチート、魔力うんたら言うよりローブがチート。神様ありがとうこれで頑張れます

「ただいまー。どうしたのタクト、一人でニヤニヤして気持ち悪いわよ？」
ぐすん・・・

朝食を食べていると周りで
『俺夢で神にあったよ』だとか『戦争か？稼ぎ時だな』とか『どの勢力が一番早く見つけるか見ものだな』などなど言い合っていた

少しでも俺の平穏が長く続きますように・・・

4話　夢の中（後書き）

前半の方は前の話に入れれたな～とか思いましたが気にしません

続きを考えてると、いつの間にかぜんぜん違う話の内容を考えてしまう・・・どないしよ

※こちらも変更いたしました。

5話　護衛

夢で神様に会ってから数日がたった。
あれから任務は主に採取系などを選び極力目立たないように努力していた
「それじゃあタクトはどこかの勢力につく気は無いの？」
「向こうから来たらしょうがないけど、こっちから出向く気は無いね。魔力はあっても俺一般人だし、戦争とか嫌だし・・・」
国に属するって大変だと思う、戦争だけなら魔力があるから何とかなる（たぶん）けど
もしかしたらそれ以外もさせられるかも知れない。派閥争うとかに巻き込まれるかも知れない・・・面倒ごとお断り

借りた籠いっぱいになるまで採ったし、これだけあれば良いかな？
「フェリそろそろ戻るよ～」
「了解～」

後はいつも通りギルドで薬草いっぱい入った籠を渡せば完了
「では報酬の5エルです～。ところでタクトさん、最近採取ばっかりですがどうしたのかな？」
「いや・・危険がある大金より危険の無い小金かなと思いまして・・・」
「ん～、そうですか～。・・・確かにあまり目立つとすぐ密かちゃいますもんね～」
うんバレテーラ流石に極端すぎたか？
「タクトおなかすいた、ごはん～早く～」
フェリさんやこっちはそれどころではないんだよ？

「大丈夫ですよ～、言いふらしたりはしませんから安心してください。けど夢を見た日からいきなり採取しか受けないなんて極端すぎますよ？」
ひとまず安心？

「モグモグパクパクハムハム」
あんな小さい体のどこにあんなに入るんだ？質量どこ行った？
「バクバク・・ねぇタクト、最近採取ばっかりでしょ？　そろそろ魔法をどかーんと使いたいんだけど」
「どかーんとねぇ・・・わかったじゃあ次は採取以外の依頼を受けようか」
「ありがと～、明日のためにいっぱい食べなきゃ。モグモグパクパクハムハム」
どう見ても食べすぎです、あんな小さい体のｒｙ

「では『オーク討伐までの護衛』の任務でよろしかったですか～？では依頼主の方を呼んでくるので少しお待ちください～」
次の日俺たちは少し特殊な護衛任務を受けた、ジルが言うにはようするに
『強い魔物倒したい→けど途中の弱い魔物相手に魔力消費するのはイヤ→ランクの低い奴を護衛として雇ってそいつらに相手してもらおう』

と言う事らしい。護衛雇ってまで倒したいのかねぇ？
ちなみにオークはＢランクの魔物だ

「お前が護衛か？大丈夫かガキと魔物じゃねぇか」
「まぁ良いじゃぇえか、別にこいつらが死んでも変わりを雇えばいい話だ」
「死にたくなかったら頑張んなさい坊や、フフフ」
ほかの２人も同じような事を言っている
結論こいつら嫌いだ、どこのヤンキーかと。依頼主はこの５人組、ジルさんやっぱ辞めても良いですか？駄目ですかわかりました

「さっさと行くぞガキ」
「・・・・死ねば良いのに」
フェリさん怖いです

サクヤＳｉｄｅ

どうもお久しぶりですサクヤです。
タクトさんと別れて１０日がたちました、すぐ来ると言っていましたがタクトさんは来てくれません。
聞くところによると真っ黒なローブを着て妖精と共に一緒に毎日薬草採取してる変な奴が居るって噂だから、薬草採取で忙しいのだろうか？
いやいやそんな分けない採取はそんなに時間はかからないから時間はあるはず・・・って事は忘れられてる？避けられてる？
「おーいサクヤ、ちょっと手伝ってくれ」

「お父さん今はそれどころではありません、黙ってて」
いやお父さんそんな顔してどうしたんです？顔が怖い？そんなことは無いですよ

「考えても仕方ない・・・来ないならこっちから行けば良いじゃない」
多分ギルドと酒場の二階の宿屋に泊まってるだろうから酒場で待ってればその内かえってくるよね？
「お父さん私ちょっと出かけてくるね」
「いやいや手伝って欲し「出かけてきますね？」・・・行ってらっしゃい・・・・」

さて到着しました受付の方の話では、今日は護衛の依頼を受けたらしい
「なので、帰ってくるのは早くて今日の夜になりますね～」
待ちます待ちますとも、こっちはもう１０日も待ってるんですから・・・
ところで、どうしてこんなにタクトさんに会いたいんでしょう？
ん～？・・・・・・・・・まぁ会えばわかるよね？とりあえず会いたいものは会いたいんだし
「早く帰ってこないかな～♪」
「・・・・青春ですね～」

タクトＳｉｄｅ

「ヘックション！！」
「どうしたの？風邪？」

「おいおい俺らには移すなよー」
いちいち腹の立つ・・・しかしなんだ？誰かが噂してるのか？
そういえば何か約束みたいなのがあったような気が・・・いや忘れてるんだからそんな大事か用じゃないか

「ところでタクトは魔法本気出すの？」
「いや、フェリと同じ位のタイムラグで使うよ。まぁ命の危険が無ければだけどね」
狼やゴブリン位ならそれでも十分通用するだろうから命の危険は無い。
もしこいつらがオーク討伐にしくじったりすれば、仕方ないけど助けなきゃならないからな、そん時は全力出しますよ

ゴブリンが現れた！　魔法で攻げ
「食らえ！！」
どかーん
なんだかフェリだけ居れば大丈夫そうだな～

「な、なかなかやるじゃねぇか、ガキも見習って働けよ」
そう言ってますが、足が震えてますよ？ビビッタ？家のフェリはすごいでしょ？
あ、またゴブリン　魔法で攻げ
「いっけー」
どかーん
倒してくれるのは良いけど、俺の分も残しておいて欲しいな～

そんな感じでもう日が暮れてきた。
結局ほとんどフェリが倒しちゃって、俺は逃げてったゴブリン2匹と狼1匹しか倒してない。
ヤンキー5人は何もしてないのにお疲れモード、いやいやどんだけ体力無いんだよ！
俺は神様ローブのおかげもあってまだ元気、フェリは・・・あんだけ暴れてどうしてあんなに元気なの？
「フゴオオ」
フェリが壊れた？いやそんな分けない、何だ？
「やっとお出ましね、さぁあんた達さっさとやっちゃいなさい」
「言われなくても！行くぞお前ら！！」

5話　護衛（後書き）

書いててつくずく思うんですが
自分文才やら物語考える才能とかねぇな・・・
これでも一生懸命頑張ってるんですよ？

6話　胸騒ぎ？

現在ヤンキー5人対オークで戦闘中
どうやら前衛4人で撹乱して、魔術師1人がでかいのを放つ作戦みたいだ

「はぁはぁ、ぐっ！！」
あっあぶない
「くらえぇぇ」　ひょい
あっ避けられた
「くそっ　これでも食らいやがれぇええ！！」
前衛の一人が剣で切りかかる
「フゴ？」
ブンッ！！
「グハッ！」
それをオークが左手一本で人もろとも弾き飛ばす

「なぁフェリ、言っちゃあ悪いが無理だぞ？これ」
「そうね、私もそう思うわ」
「おーい、あきらめて逃げようぜー」
いやマジで、いくら嫌いな奴らでも死なれるのは目覚めが悪い
「お、おう。お前らいったん引くぞ！」
案外素直に言うこと聞いたな？
「助かった・・・うおっ！あぶねぇ・・」　自分でも分かってるってことかね～？
「安心するんじゃねぇ！逃げ切ってから安心しやがれ！ガキと魔物は時間稼ぎしろ！！」
言うと思ったよ・・・Dランクになんて事言うんだよ・・・ってもうあんな遠くに・・

「さっきまでぜぇぜぇ言ってたのになんて足の速さ・・・タクトこいつ倒しちゃっていいよね？」
「良いんじゃね？正直この依頼失敗でもオークの素材売ったら十分な報酬だしな」
「了解！！　タクトは手出さないでね」
まぁサポート位はするかな・・・

風で足の間接を・・・
ヒュン！
「フガァァ！」
オークは両足のひざ間接を切り付けられその場に倒れこむ

「手出さないでって言ったじゃない！　とどめは貰うわよ！！」
火の玉が起き上がろうとしているオークに向かって飛んでいく。
・・・・が、流石はBランク両手で受け止める、まぁもう両手は使いもんにならないな
「どうやらこれまで見たいね、とっとと死になさ「フガァァァァァァ」ちょ、うるさいわよ！！」
オークが突如空に向かって叫んだ

「何したんだ？　　・・・・フェリ！囲まれてるぞ」
気がつけば周りをオークに囲まれていた
「オークが5体（内1体負傷・・・キツイな、手伝うぞ？」
「じゃぁそっちの3体は任せたわよ！！」
負傷1無傷2か・・・

「まずはトドメ・・・」
世界でも数えるほどしか居ないような実力のフェリの魔法よりもさらに大きな火の玉・・・いや火の塊が負傷しているオークを襲った
「ッ・・・！」
声にならない声を出し一瞬にして火に巻かれ崩れ落ち、顔が地面につくころには骨以外は燃え散っていた
「どう見ても人間やめてるわよね・・・・」
「失礼な、魔力が物凄い人間ですよっと」
仲間が消し飛んだ様子を見て一瞬動きが止まっていた他のオークも、すぐに動き出し攻撃を仕掛けてくる
「よっと・・・足は遅いが腕のスピードがハンパネェ・・・うおっ！」
こちらの作戦が分かっているのか、フェリと俺に2体ずつで襲ってくる。それだけなら何とでもなるが
「ランクが高いと知性も高いのかねぇ？　流石に連携されたらキツイ・・・」
フェリは手の届かない所からオークの投げてくる投石（岩？）をよけつつ攻撃している
比べこっちは、1体に集中しようとするともう1体が、その攻撃をかわすと最初の奴が拳を振るおうと距離を縮める、それをかわし距離をとり1体に集中するの繰り返し

「流石に最低限は相手に集中しなきゃ魔法は出ないか・・・」
俺はフェリみたいに飛べない。こうやって避けられるのも、神様のくれたローブのお蔭で身体能力が上がっているからだ
『対物理攻撃』ってのもあったが、当たらないに越した事はないよね？
『死ぬ程度の攻撃』から『めちゃ痛い攻撃』になっても恐怖の対象なのは変わらない。神様に今度あったら礼言わなきゃなー・・・・

さてどうするか・・・
「1体めっ！！！」
「フガアアア！！・・・・・・」
あちらは残り1体か、向こうが終わってこっちの援護に来るまで逃げ回るか？
いや、それは流石に情けない。何か案は・・・足が遅いんだからこれで何か・・・・・・・・・
・・これまでよりさらに距離を置き、向かってくる間に魔法を放つ・・・これだな！

作戦が決まれば即決行、相変わらず物凄いスピードの拳をかわし距離をとる
「・・・土手っ腹に風穴開けてやるっ！！　いけっ！」
頭の中でイメージする右手から放つ雷で敵の体に大穴が開く様子を・・・・
右手からやさしい王様のザケルガ的な攻撃が飛び出す
「フゴ？・・・・・コガアア！！」
作戦は成功、もう1体！
「ガアァァアア」
・・・あれ？

どうやら手前のオークを貫通した雷が運悪くも真後ろにいたもう一体のオークの腹にも風穴を開けたようだ
「お？ラ、ラッキー？」

さてフェリはどうした「フガァァ！」・・・終わったな

「はぁはぁ・・・そっちも終わった見たいね・・・」
「ああ、大丈夫だったか？」
「はぁはぁ・・・私があんなのに負けるはずぜぇぜぇ・・無いじゃない・・・・・」
そうはに息切らせて言われても・・・まぁいいか
「オークの素材って牙と爪とあと何かあったけ？」
「たしか皮膚も買い取って貰えたわよ」
皮か・・・・だめだ燃え尽きてやがる・・・

フェリは火の魔法しか使えず、こっちは火と雷だが、どうやら雷の方もオークの肉体を焼き尽くすには十分の威力があったようだ
「高火力も考えようか・・・」
まぁ爪と牙だけでも十二分の報酬にはなる
そういえばあの5人はどうしたかな？
まぁ悪運は強そうだから死んではないだろうけど

「剥ぎ取ってきたけど、帰れる？」
「うん、もう大丈夫よ。それにあまりここに居ても危険しかないしね」
ごもっとも、これでまたオークに遭遇なんて目も当てられない

「さっさと帰るかなー」
ザワザワ・・・なんだこの胸騒ぎは・・・・・嫌な予感しかしない、マジでオーク出そうだな急ぐか

ジルＳｉｄｅ

「それでね、そこに颯爽と登場したのがタクトさんで。山賊を一撃で倒しちゃってね・・・・ちょっと聞いてますか？」
「聞いてますよ～・・・同じ事を5回ほど（ボソ」
「そうですか、その後馬車で一緒にシルディアに・・・・・・・」
今日のお昼前に突如タクトさんを尋ねてきたサクヤさん。最初は普通の会話でとても楽しかったんですが・・・・

『それでサクヤさんとタクトさんは、どのようなご関係なんですか～？』
この一言がいけなかったのか・・・いや言わずとも結果は同じだっただろう。
まさかその後からずっと同じ話を一方的に聞かされるとは思いもしなかった・・・・

「すぐ来るって言ってたのに全然来てくれなくて・・・・・・・」
（タクトさん早く帰ってきてください・・・・）

6話　胸騒ぎ？（後書き）

いつもは感想欄位しか確認してませんが、よくよく見れば多くの方にお気に入り登録していただいてました。ビックリです。最大限の感謝を

大まかなストーリしか考えてませんし、今後唐突に思いつく設定しだいではころころ変わったりしたりして、作者自身にもにも今後の展開が分かりませんが。

今後ともよろしくお願いしますm（__）m

7話　ロマンを手に入れた

戦場から帰ってきたと思ったら、戦場だった
「それはですね、クドクドクドクド」
なんでこうなった

ーーーーーーー少し前ーーーーーーー

「やっと着いた・・・」
「ｚｚｚｚｚ・・・・・」
オークを倒した後森の入り口まで行ったが、案の定あの５人組は居なかった
それはいい、問題なのは俺が借りた馬ももって行きやがった
まさか生きて帰ってくるなんて思ってなかったんだろうな～・・・
マジ死ねばいいのに・・・・
フェリは頭の上で爆睡してるし、涎たらすのだけは勘弁してください・・・・

さてギルドに着きましたよっと・・・
あの５人が生きてるなら護衛依頼も達成って事でいいのかな？　まぁ無くてもオークの素材で当分は危険な事しなくて良いな
「戻りましたよー・・・がっ！」
ギルドに入るや否や何かに押し倒された・・・
フニフニ・・・・！この感触はマズイ奴だ、引き剥がし引き剥がし
「ん？・・・・ジルさん何してるんですか？」
「・・・・・・・／／／／」

いや顔赤くしても分かりませんよ
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
なんだこのプレッシャーは・・・・
「ジルさん何してるんですか～♪」
なんだ悪魔か

「い、いえ。私も心配してたんですよ？別にタクトさんが死んだって聴かされた後のサクヤさんが怖かったからタクトさんが帰ってきて『たすかったー』なんて思ってませんよ？」
「そうですか、ところで何時まで抱きついてるんですか？・・ふふふふ」
顔を真っ青にしたジルさんが飛び起きカウンターの向こうに飛んでいた

「・・・おーサクヤ久しぶり、どうしたんだ？」
「分かりませんか？」
脳みそフル稼働！！・・・・・・・・・わからん☆
「分かりません・・・・」取りあえず土下座
「それはですね、クドクド」

てなわけだ、かれこれ1時間はたったかな？
サクヤの言いたい事をまとめると
『すぐ来るって言ってたのに来ない』→『こっちから会いに行こう』
→『ガラの悪そうな人たちが俺が死んだとジルに報告』→『自棄酒（酒飲んでいいのか？）』→『俺帰ってきて安心』
・・・・なぜ怒られている？
いや今はそんな事はどうでも良い・・・今一番大切なのは休息だ！

現状は森よりハードですよ？

サクヤＳｉｄｅ

「ですから私は「分かった俺が悪かった」・・？」
「俺が悪かった。だから明日お詫びに昼飯をおごるよ、それで良いか？」
何を言ってるんですか、そんなご飯なんかで釣られたり・・・・
「・・・・・・・・・・・・」
待って私！！お昼をおごる・・一緒に食事・・・これはもしやデートのお誘い！どうしようういきなり過ぎますそりゃ一日中タクトさんの事考えてて私ってタクトさんのこと好きなんだなーとか思ってたりしてますがそんないきなりそんな事言われてもいや嬉しいんですが心の準備がですね・・・いやここで逃すとチャンスはもう来ないかもしれない頑張るのよ私
「・・・ダ、ダメだろうか？」
「もちろんＯＫです、明日家で待ってますね！・・・はっ！いけない急いで準備しなきゃ。では楽しみにしてますね・・・・絶対来て下さいね待ってますから」
「・・・お、おうもちろん」
これはいわゆる春の予感ですね、タクトさんが私に気があるなんて♪急いで準備しなきゃ・・・準備ってなにを準備するんですかね？とにかく準備しなきゃ

タクトＳｉｄｅ

・・・嵐は去った、願わくば明日には元に戻っていてくれる事を

「あの～タクトさん？ご飯いりますか～？」
「・・・いや遠慮しとくよ」
今日は仏滅なのかな～・・・

「次の日になりましたよっと」
「誰に言ってるの？」
「え？俺なんか言った？」
「・・・・・・・・」
朝っぱらから視線が痛いぜ

「じゃぁタクトがデートしてる間、私は適当な依頼でも受けとくわね」
「よろしくー、けどデートじゃねぇよ」
「じゃあ何なの？」
「・・・・デートとは別の何かだ」
「その何かを聞いてるんだけどね・・・・まぁ良いけど」
そんなイベントだったら喜んで行くんだけどな・・・
ご機嫌さえとれば「美人とデート」というすばらしいイベントに変わるだろうし頑張るかな

そういやこの世界に着てからまだ１１日しかたってないのか。初めてづくしで密度の濃い日々だったな、これからも当分は初めてづくしで退屈はしなさそうだな
まぁそんな感傷に浸ってたら
「ーーー迷った・・・・」
前世でもべつに方向音痴だった記憶は無いんだけどなー。まぁ街唯一の鍛冶屋だから場所聞けばすぐかな
「えーと、誰か聴きやすそうな人・・・・」
衛兵さんあたりが妥当かな？鍛冶屋も利用してそうだしね
「あのー、鍛冶屋までの道を教えてもらいたいんですが」
「ん？ああいいぞ、鍛冶屋はな」
「ちょっと隊長良いんですか？一応厳戒態勢中ですよ？」
「良いんだよ、どっち道顔も分からねぇのに捕まえられるわけ無いだろ」
「まぁ・・そうですね・・・」
「大体情報が大雑把なんだよ！この街に茶髪で白いローブを着た男なんてその辺に五万といるっての」
「一応その男ロドックの紋章の入った剣を持ってたみたいですよ？」
「剣なんざローブ着てたらわかんねぇよ・・・」
「あの～道・・」
「おおっ！すまんなちょっと上から無茶な命令が出ててな。鍛冶屋にはこの先の道を右に・・・・・・」
「ありがとうございました、お仕事頑張ってください」
「おう坊主も気いつけてな」
坊主って・・・

それにしても面倒ごとが起こってるみたいだな、巻き込まれませんように

俺が鍛冶屋に着いたときにはすでにお昼近かった
「危ねぇ～、これで遅刻とかしたら殺さそうだったな」
「誰が誰を殺すんだ？」
「うおっ！ガイウスさん・・お久しぶりです」
「おう久しぶり。・・・・え～なんだサクヤに用だろ？呼んで来るから待ってろ」
ガイウスさんも久しぶりだな～・・・
なんか様子が変だったよな？なんかすごい複雑な目で睨まれたんですけど
二日続いて仏滅！？

「タクトさんいらっしゃい」
「よお、サクヤ早速だけど飯いこうか」
別にせめてガイウスさんから離れたいとか思ってないですよ？
「今からですか分かりました、じゃぁお父さん出かけてくるね」
「・・・・おう、晩飯には帰って来いよ」
「考えとくわ」
「・・・・・・・」
だからどうして睨むんですか？
「どこか行きたい店とかある？俺依頼とギルド、宿の往復して生活してるからいまいち街の地理とかわかんないんだよ」
「それなら大通りに新しくパン屋さんが出来たみたいで、噂ではそこのランチがすごくおいしいらしいです」
「んじゃそこにするか」
よかった元に戻ってるみたいだ

ギルドとは街中央の領主の館を挟んで反対側に真新しいパン屋があった
「良い匂いだな」
「はい、私もいつか来たいって思ってたんですよ」
「パンだけならいつでも来れるだろ？」
「若い女性が一人でランチなんて寂しすぎるでしょ？」
「美人だなんて・・・・たしかに、けどサクヤは美人だし男のほうからよって来るんじゃないか？」
「村のほうでも何人か言い寄ってきたんですが、私の方もちょっと良いかな～と思い始めたとたん、何故か離れていってしまって・・・・」
・・・・近くで見て初めてわかる事もあるんだと思いますよ

パン屋はサクヤの言った通りとても美味しかった
てかこの世界にコーヒーってあったんだね、酒と紅茶しか見た事無かったよ

「これからどうする？出来れば街の探索に付き合って欲しいんだけど？」
「はい、私は今日一日暇なのでご一緒します」
ラッキー、一人で行って道に迷うのはいやだからね
「ではまずは、傭兵の方がよく行くような店を回りましょうか」
「うん助かるよ」

やって来ました武器屋
「傭兵の方はここで武器を買って行ったり、他の街から武器を取り

寄せたりするみたいですね。タクトさんは魔術師なのであまり縁はないでしょか？」
「ん～、確かに今まで刃物が必要だと思ったことは無いな」
素材剥がすのも、食材切るのも全部カマイタチ使ってるからな。カマイタチ万能説
「おいおい坊主、どれだけ優秀な魔術師かは知らないが。持っておいて損は無いぞ？」
「その根拠は？」
「そうだな、たとえば魔物の素材をはぐのに使ったり、魔術の発動までの間剣で応戦したり、魔法を使うまでも無いような敵に対して魔力の温存になる。たまに剣士と間違えて正面から突っ込んでくる馬鹿な盗賊とかも居るしな」
「私も持っていて損は無いと思います、唯でさえタクトさんは武器なしの上防具はローブっていう状態なんですから。この際です武器と防具をそろえておきましょうよ！」
ん～・・・・正直武器を持つメリットが薄すぎる・・防具は神様ローブ以上の物は存在しないだろうしな～
「いや自分は遠慮し「タクトさん！！絶対買っておいたほうが良いですよ！！」・・・・・」
あんたはこの店の店員かと・・・仕方ないね、ここで拒んでも角が立つだけな気もするし
「じゃぁ・・・何か買おうかな・・・」
押しに弱いわけじゃないんだよ？ホントだよ？

さて、買うと言ったは良いけど武器の良し悪しなんか分かんないしな・・・・どうしようか
「タクトさんこの剣はどうでしょうか？」
「良い剣だけど俺が持つには少し重いし大きすぎるかな」
サクヤさんそれは剣通り越して大剣ですよ

「ん～・・・」
「坊主！この短剣はどうだ？これなら切れ味も良ぞ、まぁ戦いにはあまり向いてないがな」
「本末転倒では？」
「ん～・・・」
口うるさいって？どうせ買うんだったら良いのが欲しいじゃないかん？これは剣、いや刀！
「おじさんこの剣も売り物？」
「ああそうだが、なんというか飾り用だな、刃が片方しかついて無い上に曲がっていやがる。俺の親父がガキの頃からある代物でな、なんだか愛着が沸いて捨てるに捨てられ無かったみたいだ」
「じぁ俺が買うよ！いくら？」
「いや金は要らんよ、親父が大事にしてた剣が誰かに使ってもらえるなら俺も嬉しいしな・・・・だが本気か？俺が言うのもなんだがどう見ても実用的じゃないぜ？」
「それでも買うよ」
「そうかい、だったら持って行きな！」
「タクトさんほんとに良いんですか？そのもっと強そうなのが良いんじゃ？」
「いやこの剣は俺の故郷の武器なんだよ、実際見たのは初めてだけどな。ここであったのも何か縁を感じるじゃないか」
転生してから初めて訪れた武器屋で日本刀と出会う。これで買う以外の選択があるはずが無い！！
けど何でこんなところに日本刀が？・・・・まいいや
こうして俺は日本刀（ロマン）を手に入れた

「次は防具ですね！今度はちゃんとしたもの買いましょうね」
ちゃんとしたものって・・・ひどい

7話　ロマンを手に入れた（後書き）

金曜日に間に合わなかった・・・orz

8話　パーティー

???Side

ふぅ・・・あいつらしつこ過ぎるだろ・・・・おとなしく主の方の手伝いでもしてれば良いものを・・・・わざわざ邪魔しに来るなよ

さて、本当にこの街に居るんだろうか？
ロンティの占いを信じてないわけじゃないけど・・・・・
あの婆さん適中率低いんだよな～・・・・・

他の候補者が見つけられない事を祈るしかないかな・・・

タクトSide

若干後悔中

何故かって？
日本刀を手に入れて心から喜んだ。これは良いんだ、日本人として正しい反応だ・・・・けどそれを見たサクヤが
「では次は防具を買いに行きましょう！！」
防具は本気で要らないんだ・・・・
だってそうだろ？こっちはすでに神様印の最強ローブを入手済みだ

ぞ？これ以上の代物があるはずが無い

「なぁ、武器は今まで持ってなかったから良いとして。防具はすでにローブがあるから要らないんだけど・・・」

「駄目です！そんな布は防具と言いません！」

だってよ神様

「けど俺のスタイルは走って戦うスタイルで「着きましたよ」・・・そうですか・・・」

ギィ・・

「おういらっしゃい」

「この人の防具を買いに来ました」

「いえいりません・・・」

「要らないって、兄ちゃん・・・これから魔物なり盗賊なりと戦ってくんだろ？」

「まぁそうですが、軽くて動きやすいので自分はこのままでも良いと思ってるんです」

「それなら家にも、軽くて動きやすい防具は売ってるぞ？　魔物の攻撃を食らったとしよう。そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「問題ありですよ！　死んじゃいますよ！」

ですよね～

「こっちのはどうだ、手足の動きを邪魔しないし、軽いぞ？」

「いやその素材ならローブとあまり変わらないんじゃ？」

「・・・・・」

「こっちはどうですか？」

「うん、すごく重そうだね」

「うぅぅ～…」
だめだこいつら

バタンッ
「すいませんちょっと奥をお借りします」
「ちょ、ちょっと兄ちゃん…」
2人が持ってくる防具にケチつけて買わずにすむ方向に持って行こうと四苦八苦してるところに、一人の青年が飛び込んで来てそのまま店の奥に去って行った

バタンッ
今度は何だ？
「すまんが店主、先ほど男が入って来なかったか？」
「・・・いや、このお客さん以外は誰も」
今度は白いローブを着た3人組が入って来た。
そういえば衛兵さんたちが白いローブの人探してたな～・・・・・・
厄介事？

「・・・・・・そうか、邪魔をしたな」
3人組がそのまま店を出て行く

「おい、もう良いぞ」
店主が店の奥に向かって話す
「ありがとうございます、助かりました」
「いや、困ったときはお互い様ってな。だが何で追っかけられてたんだ？」
お、それは気になる
「えーそれはですね・・・・」

なぜ、止まる？
「あの、どうかしましたか？」
「いえ・・・・・・あっ、そうです、自分はロドックの商人の息子でトマと言います。家は商人なんですが僕は子供の頃から傭兵になるのが夢で家を飛び出してきたんです、先ほどの３人、おそらく親が僕を連れ戻すために雇った傭兵に見つかってしまって追いかけられていたというしだいです」
青年が『これでどうだ』と言わんばかりのドヤ顔で言い放つ
「で、本当は何したんだ？」
店主がたまらず、直球質問
「えっ・・・・いや、あ、あのですから、自分は傭兵になるために家を出た商人の息子ですよ・・・・・・」
・・・・・・嘘が下手すぎる

「まぁ、言いたくないならそれでかまわねぇよ」
「・・・・ありがとうございます」
誰だって秘密の一つ二つ位あるな、さてこの騒動にまぎれて逃走を・・・・
「では、改めてタクトさんの防具を選びましょうか」
覚えてたよこの人・・・・・・

結局その後、何故かトマも交えて俺の防具選びが行われ。上からローブが着れるように軽くて動きやすく、あまりごつく無い皮の鎧を購入した
知ってたか？この世界の皮の鎧って魔物の皮で出来ていて、鉄の鎧より性能が良いんだぜ？

「タクトさんって傭兵なんですか？」
買い物も終わり、店をでたところでトマが話しかけてきた
「ああ、そうだけど？」
「そうなんですか。じゃぁ、ギグスの森の狼とゴブリンを大量に狩って、登録した次の日にDランクになったって言う傭兵をご存知ですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
答えちゃ駄目だこれは何かの罠だ
「私も聞いた事あります、ちょうどタクトさんがギルドに登録しに行った次の日でしたよね？」
ふぅ・・・・・

「えっ！じゃぁタクトさんが、その黒ローブの魔術師ですか！？そういえばさっきもローブがローブがって言ってましたね」
「・・まぁそうだけど・・・・てか黒ローブの魔術師ってなに？」
「タクトさん知らないんですか？街で噂になってますよ？『黒いローブの魔術師が森で魔物を大量虐殺してる』って、タクトさんの事だったんですか！」
もう噂に・・・・昨日ジルにオークの素材渡し損ねてよかったなー

「お、俺とパーティーを組んで下さい！！」
「は？」
「ですから、俺とパーティーを組んで下さい！！」
・・・・なんだかとてもめんどくさい状況なのでは？
「え～と、何で俺とパーティー組みたいんだ？」
「それは・・・・自分は剣には自身がありますが、魔法はからっきしです、純粋な剣士が一人だとすぐに限界が来ます。ですからタクトさんみたいな優秀な魔術師の方とパーティーが組みたいんです」
確かに、ギルドの酒場でもほとんどの傭兵がパーティを組んでいて
『普通魔術師は一人で戦闘はキツイが前線で人が要れば威力の高い

攻撃を使える。剣士は魔術師が居ないと火力不足で魔物を倒すのにとても苦労する』ってことでギルドに入りたての人以外はどこかのパーティーに入るか、新人同士でパーティーを作るかしているらしいまぁ俺とフェリは規格外だから剣士は別に要らんのだが・・・・

「どうでしょう？　剣士が居たほうがやり易いと思うんですが・・・」

「けど、タクトさんは別に剣士の方が居なくてもゴブリンと狼を倒してるんですよね？」

「そうだな～、悪いんだけど俺はパスで「良いわよ！入りなさい！！」・・・うぇ？」

フェリが居た、後ろに大量の狼とゴブリンの素材と思われる物を入れた籠を運ぶ馬が見えた

「フェリさん、お久しぶりです」

「あら？　サクヤじゃない、久しぶり～」

「え～とフェリ今なんて言ったの？」

「パーティーに入って良いって言ったの」

なぜ！？

「あの～タクトさんこちらの妖精さんは？」

「私はフェリよ、タクトの使い魔よ」

「あ、あの自分はトマと言います、剣には自信がありますよろしくお願いします！」

「トマさんよかったですね～♪」

「なぜこうなった」

その後トマとサクヤと別れギルドの宿に戻った

ちなみに、本日フェリが狩って来た魔物の素材の買取お値段しめて１００エル

「何のつもりだ？」
「何がよ」
「トマの事だよ、何でパーティーに入れたんだ？」
「ん～・・・・タクト、転生してから神様から連絡って来た？」
「ああ、ローブを貰った日に夢で出てきた」
「そうなの、私も同じような感じで出てきて『タクトにパーティーに入れて欲しいと最初に言った者に極力協力するのだ』って言われたの」
「まじか・・・・」
「私も一応神様の部下じゃない？　命令は聞くしかないのよ・・・」
なるほど、という事はトマはどこかの勢力の関係者？

「パーティーに入れた後の事は何も言われてないんだな？」
「ええ、言われて無いわ」
「じゃぁ・・・・・・力は近くで見られたら隠しきれないからしょうがないとして。トマが協力を仰いで来たら神様の言うとおり、極力協力するか」
「そうね、そうしましょう。私も今の自由な生活が気に入ったしね」
ふふふ、渋りまくってやるぜ

トマＳｉｄｅ

タクトさんが神の夢で出てきた英雄なのかな？　タクトさん良い人そうだし、そうだったら良いんだけどな～
取りあえず、邪魔しの３人に見つからないようにしないと。

けど実際タクトさんが戦ってるところを見ないとなんとも判断できないよな～・・・・・・

たしかギルドの宿屋に泊まってるって言ってたな、明日討伐系の依頼に誘ってみよう

8話　パーティー（後書き）

この世界におけるパーティ
普通のパーティは数十人のメンバーが居てその中から幾つかの依頼別に分かれて依頼をこなしていくパターンが多い

タクト達のような少人数のパーティは普段はソロで活動し、難しい依頼の場合に協力するといったパターンが普通です。そしてランクを上げていく間に新たにメンバーが増えていき、上記のパターンにシフトする

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2892q/

ある魔術師の伝説

2011年3月4日23時12分発行